

二〇一三年二月

榎本淳一編『古代中国・日本における学術と支配』（同成社）抜刷

『漢書』をめぐる読書行為と読者共同体

— 顔師古注以後を中心に —

柿沼
陽平

『漢書』をめぐる読書行為と読者共同体―顔師古注以後を中心に―

はじめに

柿沼陽平

前漢王朝の正史『漢書』は、複数の撰者の手になる重層的な構造を有し、思想的・政治的偏向も含まれ、従来難読の書といわれてきた。すなわち『漢書』は、『史記』や班彪『後伝』等を班固が再編纂したものを母体とし、そこに劉向『別録』・劉歆『七略』を転用した藝文志や、班昭（班固の妹）・馬統（馬融の弟）が統修した可能性の高い八表・天文志等を加えた史籍で（『漢書』叙伝、『後漢書』班彪伝）、儒教主義的要素や政治的偏向が含まれ、史料の厳密さに欠ける面もあるとされる。^①ゆえに『漢書』は、『史記』の内容を再編成し、『後伝』等の諸史料を断代史の名のもとに統合した史籍と評される一方で、『史記』や『後伝』を改作・剽窃した垂流の史書とも評される。^②では我々は『漢書』を史料として一体いかに扱えばよいか。

これに関して一部の先学は、『漢書』のイデオロギー的側面を吟味し、それを同時代史料と比較・照合することで、『漢書』の「誤り」を説明しようとしている。結果、実際に定説の一部が修正され、「誤り」の理由も説明されつつある。^③とくに近年は出土文字資料が増加傾向にあり、そのような新史料を用いた『漢書』の検証作業は今後益々推進

されよう。一方、別の先学は、『漢書』のイデオロギー的側面や独特な書式自体に注目し、それを通じて『漢書』固有の価値を見出そうとしている。⁵⁾これも、『漢書』の史料的人格と、班固達が『漢書』を著した社会背景を検討する際に重要な研究である。

このように『漢書』を用いた研究は従来多くの成果をもたらしてきたが、その反面、『漢書』という書籍自体が中国史上一体どう読み継がれてきたのかについては比較的研究が少ない。中でも唐代以前の漢書学に関しては吉川忠夫氏の詳細な研究があり、⁶⁾それ以後の漢書諸注に関しては楊守敬氏の輯佚等があるが、⁷⁾二〇世紀以前の『漢書』諸注を総覧した通史的研究はないようである。だが、先行研究をふまえることが歴史学の基本である以上、『漢書』諸注の整理は必須である。しかも『漢書』注釈史の研究は、『漢書』が各時代にどう読まれてきたのかという読書史研究にも繋がる。それは、『漢書』諸注がどれほど史実をのべているかだけでなく、各時代に『漢書』がどう読まれたのかに着目し、読書行為と社会との関係を探る試みである。そこで本論では、『漢書』の関連書誌情報を整理した上で、『漢書』の「読者共同体（同じような能力・背景・目的に基づく読書習慣を共有する集団）」⁸⁾の時代的变化に注目し、『漢書』諸注の成立背景を検討する。

以上の研究目標のもと、筆者は別稿で吉川論文の驥尾に付き、漢代と隋代の漢書学についてすでに次のような検討結果を得ている。すなわち、唐・顔師古注以前には少なくとも四七の『漢書』注釈が存在し、南北朝時代に最初の数量的なピークを迎えた。また漢代と南北朝では注釈の付け方が異なり、漢代人が『漢書』を自らの正史とみなし、専ら「随文釈義」・「随文注音」中心の「音義」を作成したのに対し、南北朝（とくに晋灼以後）の漢書学者はおもに補欠（別書で『漢書』の記事を補充）、備異（異聞収集）、懲妄（別書に基づき『漢書』を訂正）、論弁（史実と史書への論評）に基づく「注解」を付した。さらに隋代以前の読者一般は、各々別々の「師匠」のもとで独自に『漢書』の読み方を学び、相互に正当性を主張し、それぞれの読者共同体は並存・分散する傾向にあった。中でも晋灼注は南方

に伝播せず、漢書学の南北分化の端緒となり、南朝漢書学者は吉川氏が指摘するように「奇をてらい、他人の意見を
つぎ、知識をひけらかす」方向に傾いていった。その背後には、南朝漢書学者が各々独自の成果を修めることに
よって自己の能力を周囲に顕示し、それによって自らの地位・名声を確保せざるを得ない貴族社会の実情があった。⁹⁾
では漢書学はその後どうなったのか。¹⁰⁾ 本稿では以上の検討結果をふまえ、『漢書』読書史の流れを通史的に把握す
るため、とくに顔師古(五八一—六四五)注以後の『漢書』注釈史に注目する。それを通じて通史的視点から唐代以
前の漢書学を位置づけ直すとともに、唐代以前との比較を通して宋代以降の漢書学の特色をも浮き彫りにする。そし
て漢書学の単なる時代的盛衰のみならず、各時代の特色と、『漢書』をめぐる学術と支配の関係を論究したい。

一 顔師古注の成立とその波及効果

顔師古注は、太子李承乾のために六四一年(貞観十五)に作られた注釈で、従来の漢書学の一大集成である。その
背景には漢書学の隆盛があった。それは吉川氏がのべるように、南北朝以来の現象ではあったものの、多賀秋五郎氏
が指摘するように、とくに唐初に顕著で、その理由は唐高祖李淵が「漢への回帰」を政治的理想として『漢書』を重
視したためとみられる。¹¹⁾ 続く太宗李世民も『漢書』を重視し、古代の政治規範・先人の格言や見解等を抄出・集成し
た『群書治要』に『漢書』を引用している。中宗李顕の時にも南郊祭祀に関して褚无量や祝欽明が『漢書』郊祀志等
を交えて議論している(『旧唐書』卷一〇二褚无量伝等)。かかる唐代前期の漢書学の隆盛を背景として顔注は作られた。
顔師古が旧注をどう収集・整理したのかは別途検討すべき大問題で、たとえば吉川氏は、南北朝時代の漢書学が北
学・南学の二派に分かれていたのに対し、顔師古は北学に属し、南朝漢書学の注をほとんど引用しなかったとする。
もともと、顔注所引注以外の旧注(とくに南朝漢書学の成果)も一部現存している。敦煌文書には顔注以前の付注本

が含まれ、たとえば『漢書』匡衡張禹孔光伝残卷（敦煌石室碎金）や『漢書』蕭望之伝残卷（S2053）は蔡謨本、『漢書』蕭何曹參伝・張良伝残卷（P2973）は『漢書決疑』、『漢書』刑法志残卷（P3669、P3557）は蔡謨本か晉灼本とされる¹⁴。また『史記』三家注や『三國志』裴松之注等にも旧注が散見し、顔注と比較できる。『群書治要』所引『漢書』や『文選』所引『漢書』も顔師古注本以前のもので、蔡謨注とされる¹⁶。日本の漢籍類にも旧注佚文が含まれる¹⁷。

では顔注成立以後の漢書学はどうなったのか。結論からいうと、『漢書』は徐々に顔注本に統一され、逆に顔注未収の諸注本（とくに南朝漢書学注）は徐々に散佚していった。たとえば敦煌文書に唐代抄本とおぼしき顔注本の蕭望之伝残卷（S2185）や王莽伝下残卷（P2513）があり、唐代敦煌にすでに顔注本が流布していたことがわかる。しかも顔師古は先学の説をあたかも持論のごとく付注し、先学の名に触れないことがあり、これも旧注の整理を阻んでいる。つまり唐公認の顔注本が流布することで、「師法」が一元化され、逆に従来の異聞・異見とそれらに基づく各読者共同体同士の差異は消失していったのである。かかる顔注本の拡大過程は以下の二点から説明される。

第一に、『漢書』は『史記』・『東觀漢記』の二書¹⁹、もしくは『史記』・『後漢書』の二書とともに、唐代官学の教科書に選定された。指定教科書の中でも『東觀漢記』はのちに『後漢書』となり、それは開元以前に『東觀漢記』よりも『後漢書』が重じられるようになったためとされるが、ともかく『漢書』は開元以前以来一貫して官学教科書であった。もともと、唐代官学の中心であった国子学は本来北斉国子寺の名称・機能を継承したものとされるが、当初は学生もおらず、実質的に教育機関の体をなしておらず、隋代も貧弱なままであった²⁴。よって官学の興隆は唐代以前には波及せず、官学としての漢書学の興隆も顔注成立後に起こったといえよう。また唐代には、おもに官吏の子弟等の官吏希望者を育成する教育機関（国子学→県学）以外にも、読書・習字・算術等の普通教育を行った郷学・里学・個人私塾・仏寺私塾もあり、そこでも『漢書』は最低限書名を知悉すべき古典（可能ならば読書すべき推薦図書）とされた²⁵。これらの教育機関で用いられた『漢書』の多くも顔注本であったとみられる（後述するように、宋代

になると新たに余靖校本が国子学へ配布される)。

第二に、唐宋時代における雕版技術の確立に伴い、『漢書』諸本の中でもとくに顔注本が印刷された結果、顔注は一挙に全国的読者共同体(後述するように士大夫中心)の基礎となった。まず九九四年(淳化五)に顔注本が開版され、遅くとも九九八年(咸平元)に完成した。また淳化本に基づく版本が一〇〇四年(景德元)と一〇三五年(景祐二)にも刊行され、とくに景祐本は大々的な校訂を経たものであった。それは余靖『漢書刊誤』をふまえて余靖と王洙が詔を奉じて行なった校訂作業で、秘書閣蔵古鈔本との校合を主とし、最終的に張觀・李淑・宋祁らも加わり、国子監に頒布された(『驛台故事』卷二之十一)。王洙は范仲淹・富弼・王拱辰・余靖らとともに北宋太学制の創設に貢献し、一族は蔵書家・学者として著名で、『三劉刊誤』の撰者劉敞の母も輩出し、まさに当時の漢書読者共同体の中核の一つに位置づけられる。なお現存最古の版本は、景祐本を覆刻した北宋末南宋初刊南宋前期修本(北京図書館に二部所蔵)で、一部は影印され、百衲本となった。さらに一一四三―一一五三年(紹興十三―二三)に別系統の宋紹興中湖北提舉茶塩司刊本が刊行され、同紹興年間に南宋前期両淮江東転運司本も刊行された。紹熙・慶元年間には黄宗仁・劉之間刊『漢書』もあり、粗悪な福建刊本の中でも異彩を放っている。これらはどれも顔注本である。

以上、本節では顔注成立前後における漢書学の拡大過程について検討した。それによると顔注の定着と普及、『漢書』の官学化、雕版印刷術の刷新等は漢書学の躍進に繋がり、顔注本を中心とする士大夫達の大きな読者共同体が生まれた。またこの頃から漢書学は中国国外(日本や朝鮮等)へも伝播していった。もともと、『漢書』は唐代科擧の一科目になったものの、あまり人気がなく、士大夫の多くは詩賦による進士及第を目指したので、唐代漢書学の隆盛を一方的に誇張するのは誤りである。さらに『漢書』学習者の中にも優劣の差があり、優秀者が『漢書』によって名声を得、他者との能力差を内外に顕示することもなお可能であった。たとえば郝處俊・哥舒翰・李光弼は、『漢書』を官学で学んだわけではなく、それによって直接的利益を受けたわけでもないが、やはり南北朝人と同様、『漢書』

をよく読めたことをステータスの一つとした。³⁶ 唐代士大夫の中でも郝士美、陸金南、陸謀道・陸元感親子のように、『漢書』の精読によつて名を馳せた者は多く存在した。³⁷ ともあれ以上の検討より、南北朝時代から唐宋時代にかけて漢書学が展開したことは疑いなく、その背後には顔注本の定着、『漢書』の官学化、出版技術の刷新の三点があったと考えられる。ではその後の中国漢書学は一体どうなったのか。

二 漢書学と科挙士大夫―唐宋漢書学と金元漢書学―

雕版顔注本の成立以降、『漢書』は徐々に全国の士大夫に普及した。たとえば歐陽脩・蘇軾・蘇頌・黄庭堅などの北宋を代表する士大夫が『漢書』を愛読した。³⁸ また顔注本のダイジェスト版（房玄齡の命で敬播撰）も作られた（『廿二史劄記』巻二〇）。北宋期には国子学・太学・四門学・広文館・州学・県学が科挙用の教育へ特化し、他科目は私塾化した書院等に担われたが、³⁹ 『漢書』の読者共同体の指導者の多くは官学に存在した。

ただし宋代漢書学の中には、たんに顔注に依拠するのではなく、別途自らの『漢書』付注を試みる者も依然少なくなかった。たとえば北宋では、『漢書』等をふまえた『資治通鑑』（一〇八四年成立）が編纂され、編纂者の一人である劉敞は独自に自注本を作るほどの漢書学者であった（同じく編纂者の司馬光・劉恕も『漢書』を読んだ）。⁴⁰ 劉敞のごとく一家言をもつ漢書学者は他にも多く、唐宋代には少なからぬ付注本が出された。また『漢書正名氏議』や『漢書律曆志音義』のように、『漢書』の一部分に対して集中的に注解を付した書籍も登場し、一二〇五―一二〇七年頃には進士徐天麟による漢代典章制度の専論『西漢会要』も執筆された。その理由は、南北朝以来の類書の増加に伴い（『修文殿御覽』・『藝文類聚』・『文思博要』・『太平御覽』等）、類書の項目分類に沿って律暦や典章制度を専門的に考究する者が増加したためであろう。また唐代前後には『史記』と『漢書』の歴史叙述を比較する學術潮流も強ま

り、婁機（李曾伯補遺）『班馬字類』、倪思『班馬異同』（劉振翁評）等が著わされた。彼らの多くは人的ネットワークを構成し（所謂CBBBを活用すれば一目瞭然である）、相互に情報交換を行なったものとみられる。ただし結局顔注本を圧倒する程の底本は出現しなかった。

こうして唐宋時代に漢書学は二度目のピークを迎えた。それを支えたのは、付表によると、おもに科挙の進士レベルの士大夫であった。後述するように、じつは宋元明清の漢書注釈書はほぼ全て進士の著作で、その傾向は唐代に生じたのである。その原因は、①進士レベルの知識人にしてようやく『漢書』に付注できた点、②進士レベルの書籍でない点と流布しない点、③進士程度でない点と出版時のスポンサーが得られない点が挙げられる。現に、当時出版はまだ高価で、『漢書』付注本の版刻も容易でなく、たとえば『兩漢刊誤補遺』も撰者呉仁傑が羅田県（湖北）知事で、全州知事と親密な関係にあったために出版できた。⁽⁴⁾

もともと、漢書学隆盛の背後では、その質的低下も起こりつつあった。たとえば蘇軾「李君山房記」（『経進東坡文集事略』巻五三）は「余猶お老儒先生に見ゆるに及びて自ら言う、其の少き時には史記・漢書を求めんと欲するも得べからず、幸いにして得ば、皆な手自ら書し、日夜誦読し、惟だ及ばざるを恐る、と。近歳、市人転た相摹刻し、諸子百家の書、日に万紙を伝え、学ぶ者多くして且つ致し易きこと此の如くんば、其の文詞學術、当に昔人に倍蓰すべし。而るに後生科挙の士、皆な書を束ねて覩ず、游談根無し」と指摘する。これは、印刷技術の向上と刊本の普及が、皮肉にも怠惰な「（自称）漢書学者」の増加を招いたことをしめす。また葉夢得『石林燕語』巻八は、淳化本以前の『漢書』が写本中心で、高い稀少価値をもち、善本も多かったのに対し、淳化本以後は稀少性を失い、粗雑な版本も増加したとする。宋代以後も大蔵書家は存在したものの、⁽⁴²⁾葉夢得の言は大局的には的を得たものであろう。かかる粗本の増加も漢書学の質的低下を反映する。

ではその後、漢書学は一体どう継受されたのかというと、まず北宋末の一・二七七年に、現在の中国東北地方からモ

ンゴル高原周辺の遼（契丹）を一掃した女真族の金王朝が北宋開封を陥落させ、徽宗・欽宗以下数千名と財宝を奪取し、国子監藏版本印書等も略奪し、かくて多くの北宋本が失われた。⁽⁴³⁾これは『漢書』の版本状況にも大きな影響を与えたとみられる。もともと、元でも一三二三年以降科挙が再開され、進士应试者はなお『漢書』を含む「三史」の習得を重視した。⁽⁴⁵⁾また黒城出土文書に金版本（十三世紀前半）とおぼしき顔注本『漢書』陳咸伝（F. 2516）が含まれ、金代にも『漢書』が刊行され、当時辺境地域にも顔注本が普及していた。しかし、科挙の应试者数自体は宋代より金代を通して遠く南方に及ばず、⁽⁴⁶⁾実際に華北出身の漢書学者もそれに比例して少なかった。また『漢書』付注本の中には金人の書がなく、逆に南宋では呉仁傑『兩漢刊誤補遺』（前掲）等の付注本が刊行され、これも当時の漢書学がおもに南人に支えられたことを意味する。

続いて元代に関しては従来、刊本は少量で、子部は医書・類書、集部は宋元詩文、經部は朱子学による經書の注疏等に限られ、出版業は徐々に活気を失ったとされるが、⁽⁴⁷⁾最近では元代出版業を見直す研究もある。それによると元代は、漢文化が徹底的に破壊された暗黒時代ではなく、むしろ高官達の主導により儒学教育の普及が図られた時代で、とくに十四世紀の江南では官民共同の出版事業が盛んであった。⁽⁴⁸⁾出版業界全体の動向はともかく、たしかに史部の刊行は少なくなき、一二九七〜一三〇七年（大徳年間）には十七史の善本が得難いとの理由で、各地の「路」が『漢書』を含む十七史等を官刻した（錢曾・張金吾『愛日精廬藏書志』）。また宋本の補刻も行われ、たとえば宮内庁書陵部藏本の版心下象鼻には「大徳八年（一二三〇四）」以降の元代補刊年記が多くみえる。さらに、たとえば一三二四年（泰定元）の「元西湖書院重整書目碑」に『西漢書』の書名が含まれ、杭州の書院等でも『漢書』は読まれたようである。ただし元代には目新しい『漢書』付注本がなく、その意味で多くの読者共同体は宋代の読み方を継受した可能性が高い。その一因はおそらく、宋金代の多くの在地有力者層が基本的に科挙应试を目指したのに対して、元代には様々な出仕経路があり、科挙が求心力を失い、⁽⁴⁹⁾科挙を目指す『漢書』学習者も減少したためであろう。なお後述する

凌稚隆『漢書評林』には歴代の『漢書』に対する評価が収集されているが、それをみても金元代の評者の数は宋・明に比して格段に少ない。これも金元代における漢書学の停滞を物語る。

三 史評と考証―明代漢書学と清代漢書学の差異―

一方、明代には史書の出版があまり行われず、とくに前半期は「中国史上もつとも史学が不振だった時期⁵⁰⁾」で、『明史』藝文志にも『漢書』注釈書はない。だが、じつは明代こそが漢書学に躍進をもたらした時代であったと思われる。なぜなら謝貴安氏が指摘するように、朱元璋は農民出身の皇帝で、同じく農民出の劉邦と自らを同一視し、前漢正史の『漢書』と劉邦を神聖視したからである。かくて明代では『漢書』が經典化し、皇帝・皇族・臣下のみならず、婦女・子供（ごく一部）に至る多くの人々が『漢書』を学び、すすんで自らの蔵書に『漢書』を加え、『漢書』を刊刻した⁵¹⁾。この流れは明初以降も同様で、一五〇六―一五二二年（正徳―隆慶）には六種以上の『漢書』の版本が刊行された⁵²⁾。また明代では、科挙の受験資格が地方の官立学校（府学・州学・県学）の学生（生員）に限定され、生員が終身身分とされ、郷里内でも彼らと庶民は厳密に区別された。そして進士・舉人・監生・生員らは所謂「郷紳」と称され、その数は明代を通じて三万人から五十万人に増加した⁵³⁾。「郷紳」は必ずしも一枚岩ではなく、捐納によって生員となった者も多く含まれ、その意味で彼らは宋代士大夫と異なり、全員が高度な学識を備えていたわけではない。しかし、彼らも建前上は学を志し、『漢書』は不可欠の参考書であった。とくに当時の教育課程をしめす程端礼「程氏家塾読書分年日程」や陸世儀「思弁録」には、四書五経学習後の学生が『漢書』等を参照しつつ史学を学ぶものとされ、『漢書』は高度かつ重要な史籍とされていた⁵⁴⁾。実際には、当時『資治通鑑』等の史書（『漢書』を含む）を読み通すほどの学者は依然限定的であったとはいえ、その中心的読者が宋代士大夫から明代郷紳へ変化した点は大き

い。その上、一五八一年（万曆九）には凌稚隆『漢書評林』が刊行された。本書は『漢書』に対する歴代の評に凌稚隆自身の評を加えた大冊で、後漢人二名、晉人二名、隋人一名、唐人十三名、宋人五五名、元人四名、明人六八名の評を収集している。⁽⁵⁶⁾これも明代漢書学の隆盛を物語る。

ただし明人の多くは、『漢書』の虚実を考証するよりも、歴史的事件に対する評価の方に関心を抱いていた。現に、朱元璋以下の読者は『漢書』の史料批判に専心せず、凌稚隆も『漢書』評の収集に集中し、歴史学的考証を逐条的に行なっているわけではない。他にも孫鉞『孫月峰先生批評漢書』や鍾惺『鍾伯敬先生批評漢書』をはじめ、葛錫璠・鍾人傑・陳仁錫らの付評本が刊行された（中国古籍善本書目所収）。また史書同士の優劣を論じた凌稚隆『史漢異同補評』、穆文熙『四史鴻裁』、成孺『史漢駢枝』、許相卿『史漢方駕』、童養正『史漢文統』、郝敬『史漢愚按』等や、正史全般を評した彭以明『二十一史論贊輯要』、沈国元『二十一史論贊』、趙南星（仲弘道増続）『増定二十一史韻』等が刊行される一方で、『漢書』の考証学的研究は唐順之『兩漢疑解』や茅坤『漢書鈔』等にとどまった。史学評論の端緒は劉知幾『史通』（七一〇年）や高似孫『史略』（一二〇〇年前後）以前に遡るが、明代漢書学はとくにそれを重視した。しかも凌稚隆によれば『漢書』の善本は当時すでに稀少で、金元明代に『漢書』の校訂作業が比較的手薄であったことを裏書する。なお凌稚隆自身は善本の収集・校訂にとめたが、顔注を高く評価し、そのぶん旧注と顔注の比較や、他史料に基づく考証は等閑に付されている。つまり唐宋漢書学と明代漢書学はともに隆盛したものの、質的に異なるものであったのである。なお明末になると、出版業界全体は空前の隆盛期を迎えたが、⁽⁵⁷⁾著名な漢書学者はおらず、科挙受験者も四書しか読まず、史書は軽んじられ、書院も抑圧され（後述）、漢書学は再度沈滞した。

これに対して清代には考証学的漢書学が再び盛んとなった。すなわち、劉青芝『史漢異同』、章詒燕『史漢諍言』、曾國藩『史漢札記』等の史評は相変わらず存在する一方で、『漢書』をめぐる中心的な分析手法は考証学に移行した。まず周知のごとく、明末に政府所蔵の書籍が多く流出し、汲古閣の毛晋・絳雲樓の錢謙益・述古堂の錢曾らが多くを

収集し、清代になると毛晋・錢曾・季振宜・徐乾学らの蔵書等は何焯の紹介で清朝の内府・怡府に収蔵された。百宋一塵の黄丕烈も宋元善本を収集し、黄丕烈の死後は清末四大蔵書家（鉄琴銅劍樓・海源閣・八千卷樓・皕宋樓）等も登場した。彼らの努力によって『漢書』の善本も後代に継承された。もともと、趙孟頫・王世貞を経て天禄琳琅に収蔵された宋版『漢書』は、乾隆帝も閲覧・絶讃する程の善本だったが、嘉慶の大火等で失われた。だが他の善本多くは受け継がれ、それらが清代以降の漢書学の基礎を成した。ただし彼らが重視したのはあくまでも宋版顔注本であった（蕭該注抄本が一部残存）。

このような環境のもと、乾隆・嘉慶期に「実事求是」・「好学深思」をスローガンとする清朝考証学が江南中心に開花し、多くの漢書注本を生んだ。まず清朝考証学の開祖たる顧炎武は定職を持たず、生涯にわたり各地を流転し、錢謙益や徐乾学と交流し、所謂「笥記」の嚆矢となる『日知録』や『史漢通鑑注正』を著し、『漢書』に検討を加えている。また呉郡の惠棟は、祖父周惕・父士奇とともに「三惠の学」と呼ばれ、「求古の学（古訓の探求）」を重視し、やはり『漢書』に熟達していたとみられる。というのも、惠棟自身は『漢書』付注本を残していないものの、惠士奇は『漢書』に精通し、惠棟に師事した王鳴盛・錢大昕らも『漢書』に付注しているからである。さらに章学誠も、付注本は刊行していないとはいえ、『文史通義』書教下において班固史学の特色を論じており、やはり『漢書』に一家言を持っていた。段玉裁も『漢書』を高く評価し、『春秋』と同格の経に列すべきことを主張した（『経韵楼集』九・十経齋記）。これらの著名な学者はみな前掲大蔵書家達と交友関係をもち、当時ほぼ最高の環境下で研究できた。

ただし顧炎武・惠棟・章学誠らはあくまでも考証学者の頂に君臨する大家で、逆にその他多くはその水準に達していなかった。むしろ「惠棟・戴震の学問の流行後、天下の学者は古経を研究し、簡単に三史に目を通すのみで、それ以外に関しては中途半端な知識しかない（江藩『国朝漢学師承記』第三卷）」のが実状であった。つまり『漢書』読者共同体の規模は飛躍的に拡大したものの、その核となって自注本を刊行する程の学者は依然少数であった。彼らの

大半は宋代以後の付注本の撰者と同じく進士で、その意味で唐宋以後の読者共同体は進士を頂点とする同様の階層構造をなしたと考えられる。

だが清代漢書学者には別の特徴もあった。それは、彼らが相互に深い交友・師弟関係を有し(付表)、さらに書院の講師も少なくない点である。その一因は「宋元刻書は皆な書院に在り、山長、之を主る(『日知録』卷十八監本二十一史)」の言に象徴される⁽⁵⁷⁾とく、清代書院に善本が多く、学者が多く集い、学問水準が高かったことに求められる。そこで書院の歴史を詳しくみると、書院は明万曆年間以降、中央宦官政治に不満を抱く在野士人の拠点とみなされ、一七三三年(雍正十一)以前は政府に抑圧され、それ以後にようやく興隆し、一七九六―一八二〇年(乾隆嘉慶)以降に教員・学生の質的低下と経済状況の悪化で徐々に衰退したとされ、それは『漢書』読書史とも合致する。すなわち『漢書』に関して、一七三〇年代以前には何焯『義門読書記』以外にめばしい付注本がなく、読者共同体と書院との関係も希薄であったが、書院興隆期には付注本が量産され、撰者の王峻・杭世駿・王鳴盛・趙翼・錢大昕・錢大昭・王念孫・劉台拱らは書院所属であった。つまりこの頃から『漢書』は、王朝正統化の道具や、貴族間の差異化の道具や、科擧の参考書であることから離れ、ようやく国家支配とは距離を置いた書籍として研究されるようになってきたのである。また嘉慶年間以後は書院の荒廃が進んだものの、書院は政治的に抑圧されたわけではなく、中には優秀な漢書学者もおり、広東省屈指の学海堂書院の院長范公詒による専門書『兩漢書旧本攷』等の他、所謂注釈書も刊行された。とくに王先謙は一九〇〇年に顔師古をはじめとする四七の学説と、二〇名(大蔵書家繆荃孫を含む)の参訂をふまえた『漢書補注』を刊行し、ここに清代漢書学の一つのクライマックスを迎え、その後の読者共同体は『漢書補注』を基本的テキストとするものへと変容していったのである(中華書局版『漢書』の底本は『漢書補注』⁽⁵⁸⁾)。

おわりに

以上本稿では、『漢書』が歴代どう読まれてきたのかについて検討した。その過程で、「師法」に基づく『漢書』の「読者共同体（同じような能力・背景・目的に基づく読書習慣を共有する集団）」が魏晉期以降に林立・並存し、南北朝に最初のピークを迎えたこと、唐代にその成果を取捨選択した顔注が出現し、唐代以降の漢書学を決定的に方向付けたことを論じた。さらに唐宋時代の印刷技術と科挙制度の確立に伴い、顔注本に基づく進士主導の統一的な読者共同体が一挙に拡大し、漢書学の比較的低調な金・元代を経て、明代に再度大きな飛躍を遂げたことをのべた。このように唐代以降の『漢書』読者共同体が進士主導であった背景には、進士の有する高い学識と社会的名声の存在があり、『漢書』講読を課す科挙および「三史」常識」とする士大夫的常識の存在があった。その意味で漢書学と国家支配の関係は密接不可分であった。もつとも、明代漢書学が『漢書』に対する評を中心としたのに対し、清代漢書学は唐代漢書学と同様の考証を重んじ、また唐宋時代とは異なり、書院等を介した学者間ネットワークを通じて次々と付本が刊行された。その成果は王先謙『漢書補注』等に結実し、現在まで学界に大きな影響を与え続けている。

では現代に生きる我々は『漢書』を一体どう読めばよいのか。既述のごとく、宋元明清の『漢書』の読者共同体は進士を頂点とするヒエラルキーを共有したが、各々独自の問題関心・研究態度も保持していた。その根底には、各時代特有の基本的テキストがあった。それは幅広い読者層に支えられ、同時に彼らの解釈枠組みをゆるやかに規定した。現に、二十世紀になると『漢書』研究は躍進し、数々の付注本も作られる一方で、『漢書』研究者以外は一般に王先謙『漢書補注』を底本とする中華書局版『漢書』を読み、幅広い読者共同体を下支えしている。ただしその問題設定や付注のあり方は時代特有のもので、他の付注本と比べてつねに最良であるとは限らない。つまり我々は『漢

書』と注釈を読む際に、それが史実か否かのみならず、背後にある解釈枠組が我々の思考をどう規定しているかを考えねばならない。それによって『漢書』は「開かれたテキスト」となるのである。

【付記】 本稿は筆者の平成二四年度科学研究費補助金（研究課題「中国前漢後半期から王莽期の貨幣経済史に関する研究」、番号24820051）による研究成果の一部である。本稿執筆に際しては榎本淳一先生に事前に研究会報告をする貴重な機会をいただいた他、報告時にメンバーの先生方から諸点御示教いただいた。また宋元明清史学史の先行研究に関しては飯山知保・橘誠の両先輩より貴重な情報を賜わった。ここに謝する次第である。

註

(1) 板野長八「班固の漢王朝神話」（『儒教成立史の研究』岩波書店、一九九五年）は『漢書』を、漢堯徳説（劉氏と漢朝を聖王堯の後継とする説）と漢火徳説（漢朝を堯と同じ火徳とする説）に基づいて漢朝を神聖王朝として描いた史書とする。だが小林春樹氏は「漢書」帝紀の著述目的―『高帝紀』から『元帝紀』を中心として―（『東洋研究』一七六、二〇一〇年）等の論文でこの説を批判し、『漢書』で高祖以外の皇帝が聖王と捉えられない点を指摘し、『漢書』の編纂意図は後漢を正統的・必然的王朝として捉えることにあったとする。

(2) 『後伝』については、福井重雅「班彪『後伝』の研究―『漢書』編纂前史―」（『陸賈』新語）の研究」（汲古書院、二〇〇二年）等。

(3) 曾小霞「近三〇年『史記』・『漢書』比較研究綜述」（『陝西教育学院学報』二五―一、二〇〇九年）等。

(4) 福井重雅『漢代儒教の史的研究』（汲古書院、二〇〇五年）等。

(5) 岡崎文夫「漢書食貨志上について」（『支那学』三一―、一九二二年）、稲葉一郎『中国の歴史思想』（創文社、一九九九年）。

(6) 吉川忠夫「顔師古の『漢書』注」（『六朝精神史研究』同朋舎、一九八四年）。以下、吉川説は本論文参照。

(7) 楊守敬「漢書古注輯存序」（『楊守敬集』第五冊、湖北人民出版社、一九九七年版）、閻平凡『唐前《漢書》旧注輯佚与研究

- 述評」(『中国史研究動態』二〇〇七年第七期)。
- (8) Chartier, Roger. 1992. L'ordre des Livres: Lecteurs, Auteurs, Bibliothèques en Europe entre XIVe et XVIIIe siècle. Aix-en-Provence: Aléna.
- (9) 学会報告「『漢書』学研究—以顏師古之前為中心—」(『第二届中国古文献与传统文化國際學術研討會論文集(子稿集)』(北京師範大学京師大厦、二〇一一年一〇月一五日)。
- (10) 吉川氏は「梁、陳時代に……『漢書』が広く読まれたことを証する記録は、やはりどの時代よりも、かの魏晉時代にもまして、めだつて多い(三三三頁)」とするが、本論で論ずるように、隋唐以後にも『漢書』は読まれ、科挙の科目に定められ、多くの付注本を生み、南北朝とは異なる漢書読書史を構成した。
- (11) 多賀秋五郎「唐初三代の文教政策」(『唐代教育史の研究—日本学校教育の源流—』不昧堂書店、一九五三年)。
- (12) 李広健「中古學術与政治『漢書』顏注成書背景研究」(国立暨南國際大学、二〇〇二年)、王智群「二十年来顏師古『漢書注』研究述略」(『古籍整理研究學刊』四、二〇〇三年)等。また顏注の言語学的意義については万献初「顏師古『漢書注』音義研究綜論」(『古籍整理研究學刊』二〇一〇年第六期)等。
- (13) 倉田淳之助「漢書板本攷」(『東方學報』二七、一九五七年)、王重民「敦煌古籍叙録」(中華書局、一九七九年)、尾崎康「史籍」(『講座敦煌』5 敦煌漢文文献)大東出版社、一九九二年)、余欣「史學習染・從『漢書』写本看典籍傳承」(『中古異相—写本時代的學術・信仰与社会』(上海古籍出版社、二〇一一年)等。
- (14) 法国藏敦煌文書『漢書』刑法志抄本殘卷(p.369-p.357)について王重民「敦煌古籍叙録」(中華書局、一九三五年)は蔡謨本とし、尾崎康「史籍」は王説に賛同しつつ、晉灼注の可能性もあるとし、易平「法藏敦煌『漢書』節鈔本殘卷研究」(『北京師範大学學報(社会科学版)』二〇〇九年第六期)は晉灼本とする。
- (15) 裴駟「史記集解」所引「漢書音義」について徐建委「蔡謨『漢書音義』考索」(『古籍整理研究學刊』二〇〇三年第六期)は蔡謨注とする。他にも洲脇武志「裴駟『史記集解』所引『漢書音義』考—司馬相如列伝を中心に—」(『大東文化大学中国學論集』二五、二〇〇七年)、遠藤由里子「裴駟『史記集解』に引かれる『漢書音義』」(『梅光女学院大學論集』二七・二九、一九九四・一九九六年)、遠藤由里子「顏師古注『漢書』に採り入れられた『漢書音義』」(『慶谷寿信教授記念中国語學論集』

好文出版、二〇〇二年）等がある。また『後漢書』李賢注所引『漢書音義』について渡邊義浩・池田雅典・洲脇武志『後漢書』李賢注に引く『前書音義』について（『人文科学（大東文化大学）』九、二〇〇四年）は、『漢書』の顔師古注を中心とした複数の『漢書』注釈書」とし、洲脇武志『後漢書』李賢注所引『前書音義』考（『日本大東文化大学漢学会誌』四五、二〇〇六年）は蔡謨注と顔師古注を含む諸注釈とする。だが李賢注では『前書音義』と韋昭注・蕭該注とが区別されているので、『前書音義』＝蔡謨注と顔師古注を含む諸注釈＝蔡謨注と顔師古注＋ a 』説は正確でなく、 a に韋昭注・蕭該注が含まれない理由を説明できない。むしろ『前書音義』は蔡謨本と顔注（顔注引注も含む）のみをさすか。なお渡邊氏等は『前書音義』と顔注との数多くの一致を論拠とするが、蔡謨と顔師古の論拠はほぼ同じで、違いは蔡謨注の引用の仕方や、数少ない蔡謨自身の解釈が良くない点にある（叙例）。

- (16) 王重民『敦煌古籍叙録』（商務印書館、一九五八年）。富永一登『文選』李善注の特質（『文選李善注の研究』研文出版、一九九九年）は李善注所引顔注の存在も指摘し、後人の付加とする。

- (17) 新美寛編（鈴木隆一補）『本邦残存典籍による輯佚資料集成』（京都大学人文科学研究所、一九六八年）等。

- (18) 王鳴盛『十七史商榷』以来の研究者（楊明照『漢書顔注發覆』『学不已』齊雜著）上海古籍出版社、一九八五年等）は一般に、顔師古が他説を「抄襲（＝剽窃）」したとする。王鑫義（大櫛敦弘・遠藤隆俊訳）『顔游秦』『漢書決疑』佚文と顔師古『漢書注』との比較検討（『高知大学学術研究報告（人文科学編）』五五、二〇〇六年）も顔游秦『漢書決疑』佚文と顔注を比較し、顔師古は『漢書決疑』の八〇％を継承後に顔游秦の名を顔師古に改めたとする。一方、王永平・孫艶慶『顔師古『漢書注』『抄襲舊注』説之再検討』（『史学史研究』二〇一〇年第二期）は顔注本成立後の抄本伝来期と戦乱期を通じて顔注本は変化し、元来の顔注本は『抄襲舊注』していないとする。

- (19) 『唐六典』卷二吏部尚書条、卷四礼部尚書条。

- (20) 『唐六典』卷八門下省弘文館学士条。

- (21) 『新唐書』卷四四選舉志。

- (22) 神田喜一郎『正史の話』（『東光』二、一九四七年）。

- (23) 五十嵐正一『隋代教育制度に関する二、三の問題について』（『中国近世教育史の研究』国書刊行会、一九八四年）。

- (24) 山崎宏「隋朝の文教政策」(『隋唐仏教史研究』法蔵館、一九六七年)、註(11)多賀前掲書。
- (25) 那波利貞「唐鈔本雜抄攷」唐代庶民教育史研究の一資料―(『唐代社会文化史研究』創文社、一九七四年)。
- (26) 『驛台故事』卷二之二十、『永樂大典』卷一七四二所引『宋会要輯稿』(第五五冊)崇儒四條。
- (27) 『玉海』卷四三藝文・咸平元年七月条、『驛台故事』卷二之十一。『天祿琳琅書目』所収『漢書』(内府蔵)「淳化五年奉敕刊正、至道三年、呂端等進書」によれば淳化本刊行は至道三年(九九七)。
- (28) 『驛台故事』卷二之十一によれば、余靖『漢書刊誤』は景祐元年刊、余靖等校本は景祐二年刊。
- (29) 清・范公詒『兩漢書旧本考』は北宋本『漢書』が数本現存するとするが、どれも北宋本でない。註(13)倉田前掲論文参照。
- (30) 近藤一成「宋初の国子監・太学について」(『宋代中国科挙社会の研究』汲古書院、二〇〇九年)。
- (31) 百衲本は従来景祐本とされてきたが、尾崎康『正史宋元版の研究』(汲古書院、一九八九年)によれば、一一〇〇年代前半の刻工が版刻したもので北宋末南宋初刊本である。また補刻は南宋前期に一度のみ行なわれ、よって「通修」でなく「南宋前期修本」である。なお慶元本の参考文献欄に一一二四年(宣和六)の国子監本があるが、尾崎氏によると北宋末南宋初刊南宋前期修本の誤記か。百衲本を覆刻したものに南宋後半期の福唐郡庠刊本があり、現在宮内庁書陵部に二部、静嘉堂文庫・故宮博物院・内閣文庫・中央研究院歴史語言研究所に蔵され、中でも宮内庁書陵部(全四三冊)本は元統二年修のないう唯一のもので、原刻葉を多くとどめる。
- (32) 淳熙二年・紹熙四年・慶元五年の遞修本が静嘉堂文庫に現存する。
- (33) 黄善夫・劉元起刊本(所謂慶元本)には現在歴史民俗博物館蔵本(所謂上杉本)と松本市立図書館蔵本があり、避諱闕筆から版下作成は紹熙年間とされる。『阿部隆一遺稿集(一)宋元版篇』(汲古書院、一九九三年)によれば、前者には劉元起刊記が、後者には黄善夫刊語と劉元起等五名の校字者名があるので、前者は劉元起名義改刻本、後者は黄善夫初印本である。慶元本は宋祁校語・三劉刊誤に加え、劉元起自身が新たに十四本を校定し、諸説を以て校異を施したものである(劉元起「刻書識語」)。
- (34) 日本・朝鮮以外の諸国に『漢書』がどう受容されたかは詳細不明。だが橋誠「モンゴル語訳『資治通鑑綱目』について」

- (一)日本モンゴル学会紀要」第四一号、二〇一一年)によれば、現モンゴル国立図書館には満洲語訳『資治通鑑綱目』(一六九一年訳)のモンゴル語訳があるそうで、十八世紀以後の満州人やモンゴル人の中にも漢代史の初歩的知見をもつ者はいたうである。
- (35) 寺田隆信「土人の史的教養―『資治通鑑』の流布について―」(『明代郷紳の研究』京都大学出版会、二〇〇九年)。
- (36) 『旧唐書』巻一一〇李光弼伝、『新唐書』巻八四郝處俊列伝、巻一〇四哥舒翰列伝。
- (37) 『新唐書』巻一四三郝處俊傳、『旧唐書』巻一八八陸南金傳、陸元感墓誌。
- (38) 何良俊『四友齋叢説』(中華書局、一九五九年)。また『丞相魏公譚訓』巻八によれば慶曆二年(一〇四二)の進士蘇頌も相国寺市で掛売買を行ない、『漢書』を入手しようとしたという。
- (39) 大久保英子『明清時代書院の研究』(国書刊行会、一九七六年)、吳万居『宋代書院与宋代學術之關係』(文史哲出版社、一九九一年)、『中国歴代書院志』(江蘇教育出版社、一九九五年)、陳谷嘉・鄧洪波主編『中国書院史資料』(浙江教育出版社、一九九八年)等。
- (40) 劉恕『資治通鑑外記』、司馬光『温国文正司馬公集』卷六二与劉原道書。
- (41) 井上進『中国出版文化史―書物世界と知の風景―』(名古屋大学出版会、二〇〇二年)。
- (42) 佐藤仁『宋代の春秋学 宋代士大夫の思考世界』(研文出版、二〇〇七年)。
- (43) 『三朝北盟会編』巻九八所引『燕雲録』靖康丙午冬条、『靖康要録』巻十五靖康二年二月一日条。
- (44) 飯山知保『金元時代の華北社会と科挙制度―もう一つの「士人層」―』(早稲田大学出版部、二〇一一年)。
- (45) 遇一夫自言舉人。問所業、云通三史、試詩賦論策(『攻媿集』北行目錄上十二月十八日己亥条)。
- (46) 桑原隲藏「歴史上より観たる南北支那」(『白鳥博士還暦記念東洋史論叢』岩波書店、一九二五年)・Ho, Ping-ti. 1962. *The Ladder of Success in Imperial China: Aspects of Social Mobility 1368-1911*. New York: Columbia University Press. Robert. M. Hartwell. 1982. *Demographic, Political, and Social Transformations of China, 750-1550*. *Harvard Journal of Asiatic Studies*, vol.42, no.2 等。
- (47) 註(41) 井上前掲書。

- (48) 宮紀子『モンゴル時代の出版文化』（名古屋大学出版会、二〇〇六年）。
- (49) 註(44) 飯山前掲書。
- (50) 註(41) 井上前掲書、一七九頁。
- (51) 謝貴安「明代的漢書經典化与劉邦神聖化的現象・原因与影響」（『長江大学学报（社会科学版）』三二—二、二〇〇八年）。
- (52) 王重民『中国善本書目提要』（上海古籍出版社、一九八三年）、北京圖書館編『北京圖書館古籍善本書目』（書目文獻出版社、一九八七年）、中国古籍善本書目編輯委員會編『中国古籍善本書目』（上海古籍出版社、一九九三年）、清華大學圖書館編『清華大學圖書館藏善本書目』（清華大學出版社、二〇〇二年）等。
- (53) 寺田隆信「郷紳の登場」（『明代郷紳の研究』京都大学出版会、二〇〇九年）。
- (54) 寺田隆信「近世士人の学問と素養」（『明代郷紳の研究』京都大学出版会、二〇〇九年）。
- (55) 中砂明德「不肖の孝子——少微通鑑——」（『中国近世の福建人』名古屋大学出版会、二〇一二年）。
- (56) 『漢書評林』に関しては、朱志先『明人漢史学研究』（湖北長江出版集團、二〇一一年）参照。
- (57) 井上進『明清學術變遷史——出版と伝統學術の臨界点——』（平凡社、二〇一二年）。
- (58) 大久保英子『明清時代書院の研究』（国書刊行会、一九七六年）。
- (59) 陳仲奇「『二十五史』の校点出版の背景について——毛沢東と古籍整理事業を巡って——」（『東アジア出版文化研究——にわたずみ——』二玄社、二〇〇四年）、陳仲奇「『二十五史』校点整理事業をめぐる周恩来と姚文元の確執について」（『北東アジア研究（島根県立大学）』八、二〇〇五年）等。

付表 顔師古以後の『漢書』注

番号	書名	撰者	詳細
1	—	顔師古	顔師古注に関しては本論参照。641年に完成。姪の顔昭甫も助力（顔氏家廟碑・顔魯公集）。宋書に「班固漢書一百卷顔師古注」。
2	指瑕	王勃	王勃（650-676）。顔師古注本の誤りを指摘。所謂慶元本等に所引。
3	西漢質疑	顔師古	宋史史鈔類に「師古。三國志質疑十四卷又西漢質疑十九卷東漢質疑九卷」。
4	漢書拾遺	—	慧林『一切経音義』（783～807年成立）所引。
5	—	杜林	慧林『一切経音義』に「杜林注漢書云」、「杜林漢書注」。
6	—	劉兆	慧林『一切経音義』に「劉兆注漢書云」。
7	—	劉熙	慧林『一切経音義』に「劉熙注漢書云」。
8	漢書故事	—	慧遠『一切経音義』に「漢書故事云」、「太平御覽」卷809子部類書類に「漢書故事曰」。
9	御銓定漢書	輒處俊ら	旧唐書に「御銓定漢書八十一卷輒處俊等撰」、新唐書に「御銓定漢書八十七卷高宗與輒處俊等撰」。輒處俊は高宗期の人で（『旧唐書』輒處俊列伝・『新唐書』輒處俊列伝）、『輒處俊集』の撰者（『旧唐書』経籍志・『新唐書』藝文志）。旧唐書配列では班固・顔師古本に続き、服虔以下の諸注本と区別される。原文に割注等の形で組み込まれているためか。90巻未満で、すでに欠本あり。新唐書配列でも顧胤漢書古今集義や顔師古注漢書と別扱い。
10	漢書古今集義	顧胤	「顧胤者、蘇州呉人也。…永徽中歴遷起居郎、兼修國史。撰太宗實録二十卷成、以功加朝散大夫、授弘文館學士。以撰武德・貞觀兩朝國史八十卷成、加朝請大夫、封餘杭縣男、賜帛五百段。龍朔三年、遷司文郎中、尋卒。胤又撰漢書古今集二十卷、行於代（『舊唐書』令狐德棻列伝付顧胤列伝）。旧唐書「漢書古今集義二十卷顧胤撰」、新唐書「顧胤漢書古今集義二十卷」。『史記索隱』・『史記正義』に佚文。日本西宮武居氏藏「漢書」楊雄伝抄の欄外に藤原良秀による書込あり（948年）、姚察「漢書訓纂」や顧胤「漢書古今集義」を引く。
11	漢書正義	務静	旧唐書に「漢書正義三十卷釋務静撰」、新唐書に「僧務静漢書正義三十卷」。旧唐書配列によれば顧胤後・李善前。新唐書配列では陰景倫らの後だが誤。宋・高似孫『史略』に「務静漢書正義三十卷」、注に「唐僧」とあるので、撰者名は釈務静でなく務静。「釈」「僧」は仏僧の意。
12	漢書正名氏義	—	旧唐書に「漢書正名氏義十三卷」、新唐書に「漢書正名氏義十二卷」。旧唐書配列によれば釈務静後・李善前。

13	漢書辯惑	李善	「李善者、揚州江都人。…嘗注解文選、分爲六十卷…又撰漢書辯惑三十卷。載初元年卒（旧唐書儒学列伝上）。生年は諸説あり、富永氏によれば615-620年頃か。旧唐書に「漢書辯惑三十卷李善撰」、新唐書に「李喜漢書辯惑三十卷」、「李善漢書辯惑二十卷」。新唐書所収の『漢書辯惑』30巻本と20巻本は同一（中華書局本校勘）。
14	漢書英華	—	旧唐書に「漢書英華八巻」、新唐書に「漢書英華八巻」。
15	漢書音義	劉伯莊	新唐書に「劉伯莊又撰史記地名二十巻漢書音義二十巻」。「又」の語順が不自然なので「劉伯莊撰史記地名二十巻又漢書音義二十巻」か。すると本書は劉伯莊撰。
16	漢書音義	敬播	新唐書に「敬播注漢書四十巻又漢書音義十二巻」。史略も両書を掲載。
17	漢書議苑	元懷景	新唐書に「元懷景漢書議苑巻亡開元右庶子武陵縣男諡曰文」、注に「開元右庶子、武陵縣男。諡曰文」。
18	漢書紹訓	姚珽	新唐書に「姚珽漢書紹訓四十巻」。本書は姚詵「漢書訓纂」の要約で、その再評価を試みたもの（新唐書巻102）。
19	漢書纂誤	劉巨容	劉巨容(?-889)は徐州の人。州大将・山南東道節度使等歴任。「新唐書」に本伝。宋史に「劉巨容漢書纂誤二巻」。宋史配列によれば富弼の後だが、実際は逆。
20	漢書刊誤	張泌	張泌（生没年不明）は唐末進士で、五代後蜀（934—965）に花間派詩人として活躍。宋史に「張泌漢書刊誤一卷」。景祐2年本に余靖等の刊誤だけでなく張泌校説6条も編入され、本書のことか。
21	西漢刊誤	—	宋史に「西漢刊誤一卷不知作者」。宋書配列によれば劉巨容以後の人。『玉海』巻49藝文注に伝劉敞撰とする。
22	兩漢類要	趙世逢	趙世逢（生没年等不明）。宋史史鈔類に「趙世逢兩漢類要二十巻」。他に『榮華集』等。
23	兩漢博聞	楊侃	楊侃（965-1033）。1015年に兵部員外郎直集賢院。宋史史鈔類に「楊侃兩漢博聞十二巻」。古逸叢書三編17に南宋刻本原大影印所収。「黄金上幣」・「以斤名金」等の用語を解説。なお漢書評林陳文燭撰序「余靖爲刊誤、楊侃爲標注……」の楊侃『漢書標注』が本書かは不明。
24	漢書刊誤	余靖	余靖（1000年—1064年）は韶州の人（現在の広東省）。宋仁宗時代の諫議大夫。1024年に進士。工部尚書等歴任。景祐3年に范仲淹をかばったため左遷され、慶曆3年に再重用され、歐陽脩らと皇帝を諫め、「慶曆四諫」と称される。宋史に「余靖漢書刊誤三十巻」。本刊誤は景祐元年（1034）刊。丁丙『善本書室藏書志』に「漢書考正不分巻（闕名）」とあり、『八千卷樓書目』巻4史部は「宋余靖王洙撰影元抄本」とする。

25	漢書校語	宋祁	宋祁(998-1061)は北宋安陸の人。兄宋雍とともに進士となり、国子監直講・太常博士・龍圖閣額士・史官修撰等を歴任。歐陽脩と『新唐書』を編纂。宋祁校語は1035年成立か(本論参照)。所謂慶元本所引宋祁校語に関しては全祖望『鮚埼亭集外編』巻48 雜著「辨宋祁漢書校本」や黄雲眉「辨宋祁漢書校語」(『史学雜稿訂存』齊魯書社、1980年)等の偽物説と、張元濟『校史隨筆』等の本物説あり。
26	新校前漢書	趙抃	趙抃(1008~1084)は衢州西安の人、1034年に進士。知事等として成都・杭州・越等で善政。宋史に「趙抃新校前漢書一百卷」。
27	漢書問答	沈遘	沈遘は、母魏氏(987-1050)の年齢を考慮すると、1010-1080年頃の人か。江陰の人で進士。殿中丞知連州等歴任。新唐書に「沈遘漢書問答五卷」、宋史別史類に「漢書問答五卷」。
28	兩漢精議	唐仲	唐仲(生没年不明)。漢書纂所引。
29	兩漢雋言	林越	林越是宋人(生没年不明)。明・凌迪知增輯。宋史に「林越漢雋十卷」。宋史の分類上、史評系か。
30	前漢書綱目	富弼	富弼(1004-1083)は河南洛陽の人。范仲淹に見いだされ制科及第。対遼外交で活躍。宰相等歴任。王安石新法に反対。宋史に「富弼前漢書綱目一卷」。
31	漢書刊誤	劉敞	劉敞(1023-1089。進士)。宋史に「劉敞漢書刊誤四卷」。原著散佚し、呉仁傑『漢書刊誤補遺』に残存。宋史によれば漢書刊誤は劉敞撰だが、劉敞・劉奉世注も含まれ、「三劉刊誤」と称される。漢書標柱と区別される。明南監本や『漢書補注』にも散見。金沢市立図書館蔵南宋前期建刊一二行本(酷吏・貨殖・遊俠列傳、佞幸・匈奴伝上のみ残存)の師古注末尾にも三劉刊誤あり。慶元本と異なり、宋祁校語を欠き、刊誤の数も少なく、配置の異なる箇所もあり、慶元本の元本か(尾崎)。
32	漢書標柱	劉敞・ 劉敞・ 劉奉世	劉敞(1019-1068。進士)・劉敞(1023-1089。進士)・劉奉世(1041-1113。進士)。宋史に「三劉漢書標柱六卷劉敞劉敞劉奉世」。宋史所見「劉敞漢書刊誤四卷」は別本(漢書刊誤欄参照)。「兩漢書弁疑・王鳴盛序」によれば乾隆以前に散佚し、宋元人の採用した一部のみ明監版に残る。『宋史』巻319、王偁『東都事略』巻76、朱熹編『三朝名臣言行録』巻4、張尚英『劉敞年譜』(『宋人年譜叢刊』第4冊)等参照。三劉は祖父劉式(南唐王朝科挙主席)以来の学識を継承し、とくに劉敞は学識広く、金石学に造詣深い。
33	王先生十七史蒙求	王令	王令(1032-1059)は廣陵の人。王安石に高く評価される。他に『廣陵集』等。
34	班史誨蒙	程致道	程致道(1078-1144。錢大昕『疑年録』参照)。漢書纂所引。『潤泉日記』「程致道之文太快」は本書か。

97 『漢書』をめぐる読書行為と読者共同体

35	読史管見	胡寅	胡寅(1098-1156)。1121年に進士。胡安国の養子で、徽猷閣直学士等を歴任。漢書纂等所引。
36	唯室先生兩漢論	陳長方	陳長方(1108-1148)は福州長楽の人。号は唯室先生。1138年に進士。江陰軍学教授等歴任。他に『步里客談』・『尚書論』等あり。宋史史鈔類に「唯室先生兩漢論一卷陳長方」。
37	兩漢博議	陳季雅	陳季雅(1147-1191)は温州永嘉の人。淳熙5年に進士。隆興府教授等歴任。のち下野。宋史史鈔類に「陳季雅兩漢博議十四卷」。
38	西漢史鈔	陳傅良	陳傅良(1137-1203)は温州の人。1172年に進士。太学録等歴任。『歴代兵制』『春秋後伝』等撰。宋史史鈔類に「陳傅良西漢史鈔十七卷」。
39	辨正	朱牧	朱牧(?-1279)は閩県人。字は子文。本書は「朱子文辨正」とも称される。咸淳元年(1265)に進士(咸淳臨安志)。南宋滅亡時に殉死。漢書纂等所引。
40	兩漢刊誤補遺	呉仁傑	呉仁傑(生没年不明)は洛陽の人。朱熹門下で、淳熙年間に進士。国子学録歴任。1199年に全州(江西)郡齋から刊行。宋史に「呉仁傑兩漢刊誤補遺十卷」。錢大昭「兩漢書弁疑」王鳴盛序にいう「呉斗南補遺」。
41	漢論・漢書家範	倪遇	倪遇(生没年不明)。ともに宋史史鈔類に分類される。
42	名賢十七史確論	—	宋史史鈔類に「名賢十七史確論一百四卷不知作者」。
43	兩漢著名論	—	宋史史鈔類に「兩漢著名論二十卷」。
44	兩漢筆記	錢時	錢時(生没年不明)は杭州淳安の人。喬行簡(1156-1241)と関係するので、1230年前後の人。宋史卷407に本伝。科挙を目指さず、理学を追求。象山書院に奉職。丞相喬行簡(1156-1241)が彼を秘閣校勘に推薦し、のち下野。四庫全書では史評類に分類される。
45	元涯西漢書議	霍韜	霍韜(1487-1540)。本書はのち明・張邦奇が増修。四庫全書存目叢書所収。
46	漢書評林・漢書纂・漢書字例附	凌稚隆	漢書評林は1581年成立。
47	義門読書記・漢書校記	何焯	何焯(1661-1722)。徐乾学・翁叔元らに師事し、進士及第。武英殿での校本等に従事。死後、子の雲龍・従兄弟の堂・高弟の沈彤が春秋三伝・兩漢書・三國志に関する遺著を整理し、1751年に義門読書記6巻本刊行。蔣維鈞が1769年に58巻本刊行(のち崔高維点校)。他に、中国古籍善本書目に「漢書校記不分卷 清何焯撰 清同治十二年至十三年楊葆光抄本」とある。
48	兩漢學正・兩漢訂誤	陳景雲	陳景雲(1670-1747)は江蘇呉県の人。何焯の弟子、県学生。他に『読書記聞』等。本書は『清史稿』藝文志所収。

49	四史兼力説	史珥	史珥(1670年前後の人)。他に『滙東手談』(清代禁毀書目四種)等。鄂爾泰『詞林典故』巻8康熙15年(1676)丙辰科に「史珥山西武鄉人」。
50	漢書正誤	王峻	王峻(1694-1751)は江蘇常熟人(号は良齋)。同里の宋顧衆と陳祖范に学び、「王宋」と称される。1724年に進士。紫陽書院院長で、錢大昕らを育成。本書は『清史稿』藝文志所収。『清史稿』に本伝あり。他に『良齋詩文集』等。
51	漢書蒙拾	杭世駿	杭世駿(1696-1773)は浙江仁和人。他に『諸史然疑』等あり、『漢書』に言及。
52	漢書考証	齊召南	齊召南(1706～1768)は浙江天台の人。内閣学士・礼部侍郎等歴任。『大清一統志』編纂に参加。本考証は股本『漢書』に所見。他に『水道通考』『春秋三伝考証』等。
53	讀史糾謬	牛運震	牛運震(1706-1758)は山東滋陽の人。1733年に進士。他に『空山堂文集』等。『清史稿』に本伝あり。
54	二十二史反應錄	彭希涑	彭希涑(?-1793)は挙人、仏教居士。二十二史所見の報応故事を集めた書で、若干注あり。元々2巻本だったが、日本長崎へ船載後、黄泉道人が刪補して3巻本となり、長沢規矩也が和刻本正史諸史抄に収めた。
55	讀史札記	盧文弨	盧文弨(1717-1795)は浙江余姚の人。1752年に進士(探花)。湖南学政等歴任。乾隆33年に下野し、江・浙各書院に奉職。校書に優れる。他に『抱經堂集』等。
56	讀史雜記	沈豫	沈豫(生没年不明)は蕭山人。他に『蛾術堂集』等(兩浙翰軒統録)。道光期の諸生。郷里で教授。四六駢文に優れるが、著書『皇清經解提要』は粗雑とも評される(清代日録提要)。
57	十七史商榷	王鳴盛	王鳴盛(1722-1798)は江蘇省嘉定の人。1754年に進士。編修歴官・内閣学士等歴任。『清史稿』藝文志所収。
58	廿二史劄記	趙翼	趙翼(1727-1814)。『清史稿』藝文志所収。他に『陔餘叢考』等あり、そこでも『漢書』に言及。
59	漢書古義考	侯鄴	侯鄴(生没年不明)。『二十四史訂補』所収。
60	漢書考異(二十二史考異)	錢大昕	錢大昕(1728-1804)は江蘇省嘉定(現上海)の人。錢大昭の兄で、王鳴盛の妹婿。1751年に王鳴盛の推挙で紫陽書院に入学。院長王峻から「筆下千言、盡中典要」と評された。乾隆帝に召されて学職歴任。40歳で職を退き、『二十二考異』(『清史稿』藝文志所収)執筆。復職して『大清一統志』等の編輯に関与。他に『諸史拾遺』(『清史稿』藝文志所収)・『十駕齋養新録』・『三史拾遺』あり、諸書で『漢書』に言及。

61	姚惜抱先生前漢書評点	姚鼐	姚鼐 (1731 ~ 1815) は安徽桐城の人。室名は惜抱軒で、1763年に進士。方苞・劉大櫟と「桐城三祖」と称される。礼部主事・四庫全書纂修官等を歴任。のち下野して揚州梅花・江南紫陽・南京鐘山等の書院に奉職。本評点を組み込んだ王先謙『漢書補注』刊本が現存。
62	漢書辨疑	錢大昭	錢大昭 (1744-1813) は江蘇省嘉定の人。錢大昕の弟。1796年に孝廉方正。四庫全書の校録等に関与。本書には乾隆44年3月の王鳴盛序があり、本書を实事求是と評し、三劉刊誤や呉斗南補遺と比較。『清史稿』藝文志所収。他に『後漢書補表』等。
63	読書雑誌	王念孫	王念孫 (1744-1832) は江蘇高郵の人。師匠の戴震、戴震の弟子段玉裁、王念孫の子王引之とともに「戴段二王の学」と称される。
64	四史発伏	洪亮吉	洪亮吉 (1746-1809) は江蘇省陽湖の人。1790年に進士。翰林院編修・国史館編纂官・貴州学政等を歴任。伊犁地方への流罪後 (1800年) は郷里で著作に専念。
65	漢學拾遺	劉台拱	劉台拱 (1751 - 1805) は江蘇宝应の人。1771年に江南郷試に及第。汪中・王念孫とともに「揚州三通人」と称され、章学誠・段玉裁らと親交。乾隆学派 (顧炎武・閻若璩・錢大昕・段玉裁・王念孫・王引之ら) の流れをくむ揚州学派。劉宝楠の親族。本書は『清史稿』藝文志所収。他に『論語駢枝』・『方言補校』等。
66	漢書正訛	王元啓	稿本 (葉景葵跋あり) として中国古籍善本書目所収。
67	漢書拾遺	林茂春	稿本 (謝章铤跋あり) として中国古籍善本書目所収。
68	漢書疏證	沈欽韓	沈欽韓 (1775 ~ 1831) は江蘇省呉県の人。本書は『清史稿』藝文志所収。續修四庫全書に「漢書疏證三十六卷 清沈欽韓撰」と「漢書疏證二十七卷 清閻名撰」があるが、関係不明。他に『幼学堂文集』等。
69	宋槧漢書残本攷異	錢泰吉	中国古籍善本書目所収。手稿本らしい。
70	漢書注考證	何若瑤	何若瑤 (何宮贊。生没年不明) は広東番禺の人。1841年に進士。本書は『清史稿』藝文志所収。
71	漢書刊誤	石韞玉	石韞玉 (1800年前後の人) は呉県の人。同治蘇州府志巻65 乾隆44年己亥恩科に「呉石韞玉。見進士」、1790年に進士。他に『読論質疑』等。本書は『清史稿』藝文志所収。
72	漢書注校補	周寿昌	周寿昌 (1814 - 1884) は湖南長沙の人。1845年に進士。のち内閣学士兼礼部侍郎。光緒初下野し、北京で本書執筆。『清史稿』藝文志所収。他に『思益堂文集』等。本書自序によれば周寿昌は『史記』『漢書』に造詣の深い父・叔父硯齋・伯父念疇から薫陶を受け、父は自ら『漢書』を評校・付注する程だったが散佚。かくて周寿昌は注校補を執筆。完成までに17回も改稿し、姪の夫の王先謙の激励もあり完成。

73	学古堂日記	雷浚	雷浚(1814-1893)。「学古堂日記」に王肇釔・鳳曾叙・徐鴻鈞・朱錦綬の「読漢書日記」所収。1889年に学古堂で講義。他に『道福堂詩集』等(雷刻八種)。
74	漢書札記(越縵堂讀史札記)	李慈銘	李慈銘(1830-1894)は浙江会稽(紹興)の人。1880年に進士。山西道監察御史に至る。『清史稿』に本伝あり。他に『越縵堂日記』等。だが未刊行多く、のち蔡元培が『越縵堂日記』51冊(商務印書館、1920)編輯。1936年に『越縵堂日記補』13冊を編輯。
75	読前後漢書札記	朱次琦	朱次琦(1830年前後の人)は南海の人。1839年に進士(光緒広州府志巻46、道咸同光四朝詩史甲集巻2)。本書は伝抄本。
76	漢書瑣言	沈家本	沈家本(1840—1913)。1883年に進士。1911年に法部左侍郎・袁世凱内閣司法大臣。他に『歴代刑法考』・『読史瑣言』等。
77	漢書管見	朱一新	朱一新(1852-1900)は浙江義烏の人。1876年に進士。陝西道監察御史となった後、下野し、張之洞の招きで広雅書院で教育に従事。他に『無邪堂答問』等。『清史』に本伝。本書は『清史稿』藝文志所見。
78	漢書補注	王先謙	王先謙(1842-1917)は湖南省長沙の人。1865年に進士。翰林院庶吉士・散館編修等を歴任(清王葵園先生先謙自定年譜)。阮元・姚鼐の後を継いで『続皇清經解』・『続古文辭類纂』を編纂。1889年に下野して長沙岳麓書院院長となる。科挙廃止と西洋科学の重視を主張。本書は光緒26年(1900)刊行で、『清史稿』藝文志所収。汲古閣本を底本とし、百衲本・毛氏汲古閣本・武英殿本・金陵書局本等を校合。引用專著47、参訂者20名。王先謙は周寿昌の姪の夫で、本書も周寿昌『漢書注校補』の説を継受(清人文集別録)。なお参訂者に朱一新・李慈銘がおり、各々漢書に付注したが、補注によれば朱一新『漢書管見』は未完成で、李慈銘説も反映されていない。よって補注出版時に両書は未刊。
79	漢書引経異文祿証	繆祐孫	繆祐孫(1851-1894)。1886年に進士。オランダ出張(～1889年)。
80	漢書佚文	王仁俊	王仁俊(1866-1913)は江蘇吳興の人。1892年に進士。俞樾の弟子で、張之洞の門人。京師任学部図書局副局長兼大学堂教習等を歴任。漢学・古注を重視し、『十參経漢注四十種輯佚書』を撰す。他に『玉函山房輯佚書統編』等。
81	廿二史劄記	楊家駱	楊家駱(生没年不明)。
82	讀漢書札記	寧調元	寧調元(1873～1913)は湖南醴陵の人。1904年に華興會に入り、1905年に日本留学。帰国後に反清革命に失敗して日本へ亡命。のち『帝國日報』の主編、『民声日報』を創刊。武昌で死亡。他に『太一遺書』等。

83	漢書補注補正・漢書窺管・讀漢書札記	楊樹達	楊樹達（1885-1956）は湖南長沙の人。1905年に日本留学。1911年に帰国し、教授職等歴任。他に『詞詮』等。
84	漢書補注訂誤	周正権	詳細不明。
85	漢書考證	史学海	詳細不明。
86	二十一史徵	徐汾	詳細不明。
87	漢書古字類	—	寶樹堂遺書。稷香館叢書説文疑十二卷附漢書古字一卷音義異同一卷と関係か。
88	兩漢条記	蔣曰豫	蔣曰豫（生没年不明）は晚清陽湖の人で、「歴署元氏知縣蔚州知州(晚清移詩匯)」。他に『韓詩輯』『論語集解校補』『兩漢伝経表』等あり。江蘇采輯書目所収。

※ 本表は『漢書』全体に対する注を付した顔師古以後の歴代書籍をあつめたもの。史評類は入れず、適宜本論で紹介した。詳細欄には書籍・撰者の詳細をしるし、適宜関連書籍も引用した。関連書籍の中でも本稿本文所引分は適宜書名を略した。姚振宗は『隋書経籍志考証』、章宗源は『隋書経籍志考証』。詳攷は輿膳宏・川合康三『隋書経籍志詳攷』、吉川は吉川忠夫「顔師古の『漢書』注」、尾崎は『正史宋元版の研究』をさす。